

ので大変と思ひ駅に行つたのですが昨日からの不通のため椅子の空き間がなく五時間立ったまま、しだいに陣痛がだんだんはげしくなりこまりました。家には小さい子供や病人がいるのでどうしてもかえらなければと思ひ必死でがんばりました。十二時二十分頃藤山駅近くになったとき破水してしまいました。汽車からおりて這うようにして家にかえり一時に無事優を産むことが出来ました。しかし優の誕生を喜ぶ間もなく愛子の命の火が消えました。思えば幸薄く何一ツとして喜びも知らずに死んでしまった。愛子には悲しみがいつまでも残ります。どうしようも無かつたことを今でも思い起こします。当時は着物も無く食べるものもなく親戚や官舎や村人達には言葉では言い表すことの出来ぬほどお世話になりました。昭和二十二年七月三十日瀉端が帰って来ました。帰るとすぐ大和田炭鉱で働きました。長男敏夫は大和田駅に勤め私も炭鉱で働きました。その炭鉱も北海道では一番初めに閉山となつてしまい、次男貞夫に世話してもらひ札幌豊平区白石の田中繊維工場の寮で働きましたが、身体を悪くして三年で止め静養しているとき、阿部ちい子さん

の世話で道庁の母子会の掃除婦として働くことが出来ました。

道庁爆破事件のあつた時には地下の美容院におりましたが、艦砲射撃を受けたような音でした。四十四年一月十九日瀉端は心不全のため死亡しました。朝は道庁に夕方には豊平区役所の掃除に精を出しました。どちらも十三年間働くことが出来ました。私は昭和五十八年まで働かせていただきました。私は明治大正昭和と平成と成りましたが今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

### 引揚者体験の一断片（塩倉庫収容）

北海道 中川 教徳

昭和二十年八月十五日終戦の詔勅下る。後十日おいて八月二十五日未明、突如として樺太真岡の市街は、大砲と機銃掃射の発射音で庶民の夢は破られた。

真岡駐屯の旭部隊の応戦かな、と思つているうち、射撃音は益々激しくなる。教員住宅玄関のガラス戸に破裂

弾の破片が飛んで来てガラス戸を破壊する。子供達は一時布団をかぶせて押入れに退避させたが危険度が漸次増加するように思われたので、ときを見計らって住宅近くの畑に構築した防空壕に全員退避した。外界をうかがっても、実況は全然つかめない。妻と相談したが、良い対策の知恵がなかなか浮かばない。とにかくどうなるかわからないが山越えで豊原に向かって逃げて見ようということに決まり子供は三歳(男)五歳(男)八歳(女)十一歳(男)十四歳(男)計六人。まづ三歳の幼児を背負い、五歳以上は全部徒歩の強行軍、無謀な計画だったが道がないままに、立ちどころに実行に移されたのだ。

不戦条約締結のソ連軍の不信の進攻とはやがてうなづけると共にこのような暴挙も、自然のときの推移から何の危惧も恐ろしさも感じないでとり得た策と思うと、平生並みの感覚を超越した心理状態になっていたのではないだろうか。

何とかしなければどう仕様もないせっぱつまった施すすべての見せせない暴挙。先ず家族全員行軍可能そして寒さも防げる衣類の調達、有り合わせものでもどうにか用

意が出来た。隣の西谷先生はどうしたろうか。談合の暇もゆとりもない。ただ安全な避難場所に行きつく願だけで一ぱいだった。銃弾音はポツン、ポツンと言った感じの状態になった。そら出掛けよう。三歳の児に手製の防空帽をかぶせて、ヘコ帯で背負った父の私が万一の場合を思っって日本刀一振りつついっい持参してしまっった。

開墾に汗水流し私達が数年間お世話になった思い出の畑地にさようならの気持で裏山伝いに登りかけて、しばらく行くと先方に人声がする。何事かと思れば手に包帯をぐるぐる巻いた軍服姿のソ連人と思われる男の声で手を高く挙げてこちらへこいと手招きをする。二十メートルも離れていただろうか。妻はとっさに刀を畔間に捨てなさいと同時に作物の成育する畦間にいとも簡単に日本刀は消えた。誰もそんなブツそんなものとは気がつかない。極めて自然の間に行われた所作だったので気がついた者はいない。

私達に機関銃座側に座るように手振りで誘導する動作に変化はない。良かった。すると中の上官らしいのが、上方に向けてピストル一発発射する赤色を帯びた尾を引

く曳光弾のようなものだとすると、それまで散発状態だった銃弾音がピタッと止まる。私は安全地帯にしてくれたんだと直ちに覚えた。そしてやさしくさとすように静かに腰をおろして休んでおれ！と手振り身振りで、教えてくれた。前線の日本兵もこうなんだろうかとつくづく考えさせられた。見れば機関銃座をがちり据え付け銃口は私達が上って来た方向に向いているのではないか。一瞬ぞくぞくした。万一引金が引かれていたら私達八人は一卷の終わりだった。射撃しなかったのは防空帽をかぶった背負児が背中にいたからだ、兵士達は笑いをまじえて好意を示してくれた。若し英語が話せば多少様子もわかり、用が足りるのではないかと思い、私、「キャンニュースピークイングリッシュ」話しかけたが手を横に振って通じない。手ぶり身振りで話したことは。私「私は此の附近に住んでいる住民だが、突然の進撃にあい豊原方面に逃げて行くところを逮捕されたのだ。」兵「此の附近には住民が殆ど家の中にいないようだがなぜか。」私「急の進撃を受けたので日本人は殆ど防空壕の中にかくれているんだらう。」兵「何か皆に伝える方法

はないか。」私「私が各戸の防空壕の人々を呼び出す役をする。安全を保証してくれ。」兵「よろしい。たのむ！」

私の住宅附近、真岡第四校在学学生住居の本泊地域ゆえ、殆ど知りつくしているので、呼び集めるに、手間暇はかからない。先ず近親の蝦名家の壕へ皆出てこい。何の心配もない。安全を守ってくれる。集まる者応援して呼びに行く者。束の間に殆ど残る者なくらい、ニコニコした安堵の顔色に笑みを浮かべて集結。十時頃にもなったらうか。婦人と子供は一応家に帰され十五、六歳以上の男子は真岡築港の塩倉庫に収容されることになった。

## 五十四年目の追憶

北海道 紺野 敏夫

引揚当時は終戦直後の八月二十日夜十二時出船。十九歳の長男いわく万一のときは親子一緒と決心して乗船